

2025 年度研究旅行奨励制度報告書

民俗学者・山口麻太郎と
実業家・松永安左エ門の足跡をたどる

27AR170

国際文化学部国際文化学科

吉田伊織

目次

1. 研究の背景と目的、および研究旅行について
 - 1-1 はじめに：研究の背景
 - 1-2 研究の目的
 - 1-3 研究課題

2. 研究方法と研究旅行の実施報告
 - 2-1 研究方法
 - 2-2 研究旅行の実施報告と知見

3. 山口麻太郎の研究方法の形成と実態の分析

4. 松永安左エ門の支援動機と具体的内容の分析
 - 4-1 松永の支援動機：郷土愛と文化的危機感
 - 4-2 支援の具体的内容：共同プロデューサー的機能

5. 郷土研究所の活動と文化的影響の考察
 - 5-1 郷土研究所の活動：地域の学術プラットフォームとしての機能
 - 5-2 文化財保護の「制度化」への先行者的役割
 - 5-3 結論

6. まとめ

1. 研究の背景と目的、および研究旅行について

1-1 はじめに：研究の背景

私の故郷である長崎県の離島「壱岐」の文化史を考察するうえで、最も重要な人物である民俗学者・山口麻太郎（やまぐち あさたろう、1908–1984）に着目している。理由として今後、卒業論文における主要な研究対象として位置付ける。

山口麻太郎は、戦前から戦後にかけて活躍した民俗学者であり、民俗学の父と呼ばれる柳田國男に師事し、故郷壱岐の歴史、民俗、考古に関する膨大な資料を、独学かつ体系的な手法で収集・整理し、その成果を『壱岐国史』『山口麻太郎著作集』といった数多くの著作として結実させている。

しかし、戦前・戦後という混乱期を通じて、在野の研究者が自身の活動を継続し、その成果を公刊するためには、経済的な基盤や研究環境の整備に加えて、出版・流通経路の確保が不可欠であった。そこで、山口の研究活動を支えたのが、実業家として「電力の鬼」の異名を持ちながら、茶人「耳庵」としても知られる稀代の文化支援者、松永安左エ門（まつなが やすぎえもん、1875–1971）であった。松永は故郷である壱岐の文化財喪失に対する強い危機感を抱き、山口の私設研究機関である「壱岐郷土研究所」の設立と運営に対して、包括的かつ戦略的な支援を提供していた。

本研究は、この二人の「在野の民俗学者と文化人でもある実業家のパトロン」という協働関係を分析し、山口の研究の継続と質の向上に果たした役割、また、壱岐の文化財保護と地域学術基盤の形成に及ぼした影響を明らかにすることを目的とする。

1-2 研究の目的

本研究の目的は、山口麻太郎と松永安左エ門の協働関係に着目し、両者がどのようにして壱岐の歴史・文化研究を展開したのかを明らかにすることである。具体的には、(1)山口が確立した研究方法の形成過程とその特徴について、(2)松永が山口の活動を支援した背景にある動機と具体的な支援方法について、(3)両者の協働によって運営された郷土研究所の活動の意義、(4)昭和期以降の文化財保護および地域文化研究史におけるその位置付けを考察していく。この目的を達成するために、2025年度の研究旅行奨励制度を活用し、長崎県（長崎市・壱岐市）および関東圏、福岡市の関連資料を現地確認・収集を行い、その成果を基に報告書を作成する。

1-3 研究課題

本報告は、以下の四つの研究課題を中心に考察を行う。

- ① 山口麻太郎の研究は、どのような過程を経て形成され、どのような特徴を持つのか。
- ② 松永安左エ門は、いかなる動機と意図のもとで山口を支援したのか、その支援はどのような方法で行われたのか。

③山口と松永の協働によって運営された郷土研究所の活動は、昭和期における文化財保護や地域文化保存にどのような影響を及ぼしたのか。

④両者の活動は、日本の地方文化研究史の中でどのような意義を持ち、どのように位置づけられるのか。

2. 研究方法と研究旅行の実施報告

2-1 研究方法について

本研究では、以下の多角的なアプローチに基づき、文献調査と現地調査、フィールドワークを組み合わせて分析を行った。

文献調査では、『壱岐郷土研究所日誌』および『山口麻太郎著作集（全三巻）』を中心に、山口麻太郎の研究方法（史料筆写、分類整理、学際的視点*）と記録の特徴を分析した。あわせて、松永安左エ門の自叙伝や支援関連文書（書簡、文化活動記録）を確認し、山口への支援動機および支援内容に関する記述を抽出・整理した。

*山口の研究方法における「学際的視点」は、歴史・民俗・地理などといった複数の分野の視点を組み合わせて壱岐の地域文化を総合的に記録、研究することを指す。

現地調査（研究旅行）では、（長崎市の長崎歴史文化博物館）、壱岐市の（松永安左エ門記念館）、福岡市（福岡県立図書館）、東京都（国立国会図書館）を訪問し、山口の写本資料や松永の支援記録などの一次資料の収集および確認を行った。

以下図 2~4 はすべて長崎歴史文化博物館所蔵資料で筆写が撮影したもの。

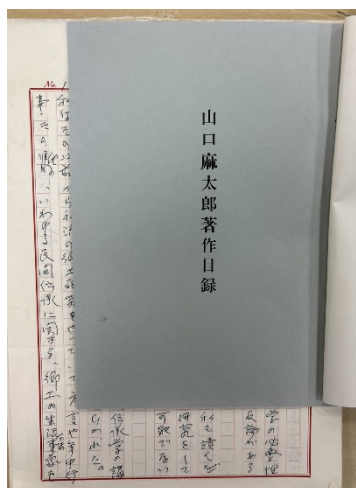


図1 山口麻太郎著作集

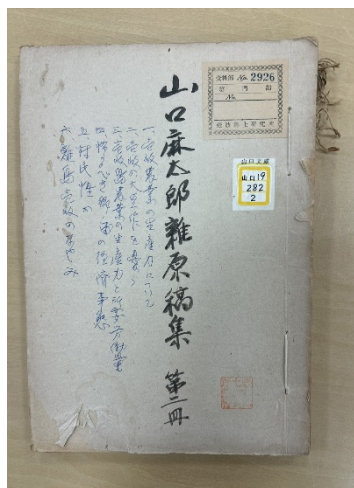


図2 山口麻太郎雑原稿集

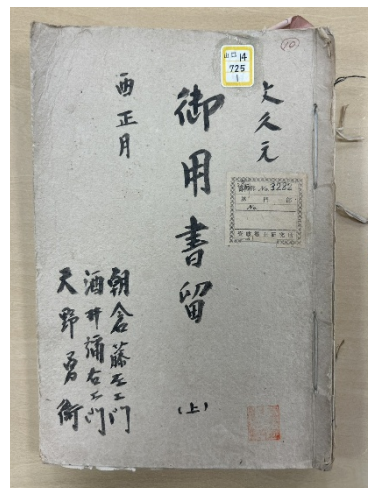


図3 御用書留

フィールドワークとして、壱岐市内の郷土研究所跡地、地域資料館、神社、漁村・農村を訪問し、山口の研究環境、調査対象地を実際に視察した。これにより、山口の研究活動が地域社会と密接に結びついていた実態を体感的に把握することができた。また、松永に

関する地域や施設も併せて訪問し、松永の文化人としての活動の広がりを確認した。



図4 柳瀬山荘 筆写撮影



図5 柳瀬山荘 筆写撮影

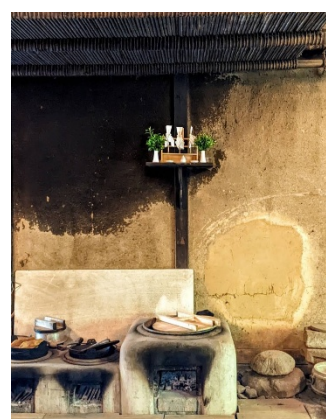


図6 柳瀬山荘 筆写撮影



図7 松永記念館 筆写撮影



図8 松永記念館 筆写撮影



図9 松永記念館周辺の街並み

資料比較と影響評価では、収集した日誌・写本・著作の内容を相互に照合し、山口の資料整理の方法および分類体系の特性を明確にした。さらに、昭和期の文化財保護運動に関する記録と比較することで、両者の活動が地域文化の保存や学術的蓄積に与えた社会的影響について検討した。

2-2 研究旅行の実施報告と知見

日程	地域	調査施設等	研究課題との関連と主要な知見
8月 16 ～ 18 日	長 崎 市	長崎歴史文化博物館	【課題1】山口の研究方法の解明。山口の「原本忠実の筆写」手法を確認した。原資料の書式・配置・欠損状態まで再現しようとする姿勢から、資料保存に対する強い使命感から来ていると分析した。
8月 18	福 岡	松永関連資料所蔵施設	【課題2】松永の支援動機と支援方法の解明。松永の支援が郷土愛や危機感に基づくものであり、出版

日程	地域	調査施設等	研究課題との関連と主要な知見
～ 19 日	市	(県立図書館、福岡市美術館)	支援や研究方向の助言など、知識・人的ネットワークの提供を含んでいたことを確認した。松永の共同プロデューサー的役割を裏付ける資料を収集した。
8月 19 ～ 21 日	壱 岐 市	地域資料館 (松永安左 エ門記念館 一支国博物 館)、神社、 漁村・農村	【課題3】郷土研究所の活動実態と影響を確認。地域資料館(松永安左エ門記念館や一支国博物館、郷ノ浦図書館)での資料閲覧を行った。山口の日記に記録された神社参拝や漁業・農業視察といった現地調査をめぐり、地域の生活文化と密接に結びついていたことを体感的に理解した。
9月 17 日	小 田 原	松永記念館 図8～9	【課題2 深化】松永の文化的造詣の確認。茶道具・美術品・古書の収集状況から、松永が「耳庵」として東洋美術・歴史に深い知見を有していたことを把握した。山口の研究の学術的価値を正確に理解できた根拠となる。
9月 18 日	所 沢 市	柳瀬山荘 (黄林閣) 図5～7	【課題2 深化】松永の文化人交流の実態確認。柳瀬山荘が、実業界の人物だけでなく、多くの文化人・学者との交流拠点として機能し、このネットワークこそが、山口の研究成果を広める「流通・献本ルート」の基盤となっていた可能性が示唆される。
9月 19 日	東 京 都	国立国会図 書館・国立 博物館	【課題2 深化】松永の中央ネットワークの確認。国立国会図書館では、出版物の所蔵状況や寄贈資料の展示記録から、松永が中央の学術・文化機関と強い関係を持っていたことが確認でき、それが山口の出版や資料収集(中央からの情報提供)を支えていたことが裏付けられる。

3. 山口麻太郎の研究方法の形成と実態の分析

3-1 在野研究者としての学問的形成

山口麻太郎は、高等小学校卒業後、職に就きながら独学で郷土研究を深め、最終的に柳田國男に入門したことで、民俗学を自身の研究の軸に据えた。在野の研究者という立場にありながら、彼の研究は極めて体系的であり、その特徴は、長崎市での現地調査を通して確認された以下の三点に集約される。

(1) 原本忠実の筆写・記録主義の徹底

研究旅行で長崎にて確認した山口の写本は、彼の研究の根本が、失われつつある地域の一次史料を「一字一句違わず」記録し尽くすという、徹底した記録主義にあったことを示している。

彼は、今西家から借りた漁業関連文書や、慶応から明治初期にかけての御触書、鯨組の小納屋帳簿など、多岐にわたる古文書を筆写した。これらの行為は単なる資料収集ではなく、原本が散逸・焼失した場合に備える資料保全を目的としたものであった。山口の筆写は、原資料の書式や配置、欠損箇所までも忠実に再現する点に特徴があり、その記録自体が「準一次史料」としての価値を持つことを確立している。この姿勢は、彼の研究の信頼性を担保するうえで決定的な役割を果たした。

(2) 学際的分類と目録整理

山口は、柳田國男の影響を受け、民俗学を主軸としながらも、歴史学・考古学を横断する学際的なアプローチを実践していた。彼は収集した膨大な資料を、単なる雑録として扱うのではなく、巻物、帳簿、御触書、民話、方言といったジャンルに整理し、独自の分類体系を構築した。

この体系的な資料整理は、山口の研究活動を単なる個人的な収集の域に留めるものではなく、後の研究者が利用可能な地域学術基盤（プラットフォーム）として機能させるものでもあった点に大きな特徴がある。

(3) 現地密着型フィールドワーク

山口の研究は、徹底した現地密着型フィールドワークによって支えられていた。

『日誌 壱岐郷土研究所』には、「講中組織の研究」への集中的な取り組みをはじめ、漁村・農村における生活慣習の視察や、古老からの口承伝承の聞き取り記録が詳細に残されている。

彼は、文字資料に現れない庶民の生活文化を、自らの足で歩き、五感を通じて体感することで補完し、文献資料と現地情報を照合する統合的な分析手法を実践していた。この現地密着の姿勢は、松永安左エ門が山口を「信頼できる研究者」と判断した重要な要因の一つであったと考えられる。



図10 山口の新聞コラムと原稿
長崎歴史文化博物館所蔵 筆写撮影



図 11 壹岐国名勝図誌

長崎歴史文化博物館所蔵 筆写撮影

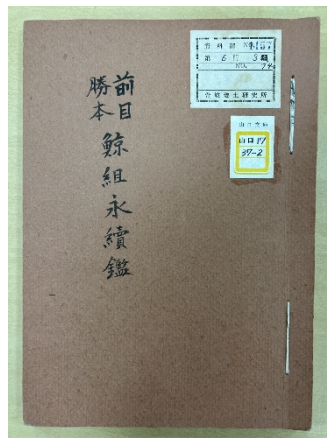


図 12 前目録本組永続鑑

長崎歴史文化博物館所蔵 筆写撮影

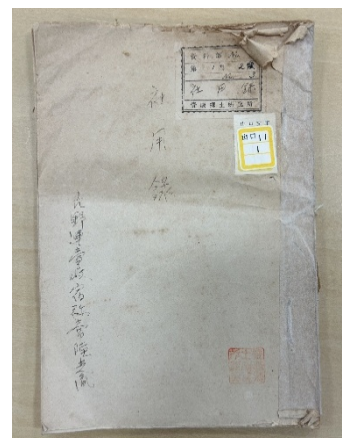


図 13 社用録

長崎歴史文化博物館所蔵 筆写撮影

4. 松永安左エ門の支援動機と具体的内容の分析

4-1 松永の支援動機：郷土愛と文化的危機感

福岡市や小田原市、東京都における関係資料の確認から、実業家である松永安左エ門が山口麻太郎を支援した動機は、単一ではなく、複合的かつ戦略的であったことが明らかになった。

(1) 郷土愛と文化資料喪失への切迫感

松永は、自身の故郷である壱岐を含む地方文化に対し、強い文化資料喪失への危機感を抱いていた。彼は、電力事業を通じて日本の近代化を推進する一方で、その過程で失われていく伝統文化の価値を誰よりも理解しており、「今保存しなければ地域の歴史が断絶する」という切迫した問題意識を有していた。この認識が、山口への支援を決断させた最大の動機であったと考えられる。

また、松永は、文化保護は単なる郷土愛の発露としてではなく、「地域の誇り」であると同時に「国家の文化的基盤」として捉えており、文化遺産を国家的視点から評価する姿勢を有していた点が特徴的である。

(2) 山口の研究者としての能力への信頼

松永は、山口の原本忠実の筆写や体系的な資料整理といった厳密な研究方法に、在野研究者の域を超えた専門的能力を見出していた。松永自身が文化人として培ってきた経験から、資料保全という重要な使命を任せられるのは、情熱だけでなく実証的能力を備えた研究者が必要であり、その条件を満たす存在が山口であると判断したと考えられる。

4-2 支援の具体的内容：共同プロデューサー的機能

研究旅行により収集・確認した松永関連資料から、彼の支援は単なる金銭援助（パトロン）に留まらず、山口の研究活動の方向性を定め、その成果の最大化するための「共同プ

ロデューサー」的役割を果たしていたことが示された。

支援カテゴリー	詳細な内容と中央ネットワークの活用
研究環境整備	研究所の設備や維持費の支援に加え、学会誌や中央の専門資料の寄贈。
研究の方向性助言	平戸藩法令集の編纂・刊行委託など、研究成果の「出口」を意識した課題提示。
出版・流通支援	印刷費援助や原稿料の給付に加え、電力事業や柳瀬山荘（黄林閣）で築いた人脈を活用し、山口の著作の販売ルート確保や、影響力のある文化人・学者（渋沢敬三、佐伯好郎ら等）への献本（評判作り）を主導。
運営継続支援	郷土研究所の長期的運営計画の助言を行い、活動の 持続可能性 を担保した。

柳瀬山荘（黄林閣）での調査から、松永の文化的交流の場が、実業界にとどまらず、学界・文化界の有力者を巻き込む「文化サロン」として機能していたことが確認された。このサロンを通じて形成された中央のネットワークこそが、山口という地方研究者の成果を、学会や出版界へとスムーズに流通させるための不可欠なパイプ役となったと考えられる。

松永の支援は、地方の研究者が最も欠きやすい「社会的信頼」と「中央との接点」を包括的に提供するものであり、その点に支援の本質的意義があったといえる。

5. 郷土研究所の活動と文化的影響の考察

5-1 郷土研究所の活動：地域学術プラットフォームとしての機能

松永の支援のもと、1933年（昭和8年）に設立された私設の壱岐郷土研究所は、山口麻太郎個人の研究拠点にとどまらず、地域に関わる知識や資料が集積・整理される場として機能していたことが確認された。

山口は同研究所において、捕鯨史、講中組織、民話・伝説など多様な主題を対象とした調査・記録を行い、その成果を『壱岐国史』や『山口麻太郎著作集』としてまとめている。これにより、壱岐の文化・歴史に関する知見が、地域内部のみならず、中央の学界においても参照可能な形で共有される基盤が形成されたと考えられる。

5-2 文化財保護の「制度化」への先行者的役割

山口の研究活動と松永の支援は、公的な文化財保護制度が十分に整備されていなかった昭和初期において、地域資料の記録と保存を実践的に進めた点で注目される。

(1) 文化財指定の基礎資料の集積

山口が収集・整理した古文書、民俗資料、地誌的記録は、後年、壱岐市や長崎県において、文化財の調査や指定を行う際、重要な参考資料となった。

これらの資料は、当該地域における文化財の所在や内容を把握するための基礎情報として活用されており、場合によっては他に代替資料が存在しない例も見られる。

【考察】

山口の研究活動と松永の支援は、行政による公的な保護活動が始まる以前の段階で、「何を文化財として、何を記録として残すべきか」という地域文化の基準を提示していたと位置づけられる。山口の研究成果が、1967年（昭和42年）に長崎県立図書館・美術博物館に寄贈されたことは、私的な研究活動の成果が公的な文化財資源へと引き継がれていく過程を示す事例といえる。

(2) 地方文化研究における協働モデルの確立

松永による山口への支援は、山口個人の研究活動を継続的に支える役割を果たしており、研究資源が中央に集中しがちな日本の学術環境において、地方の在野研究者が公的な制度に頼ることなく、自律性を保ちながら活動を継続・発展させるといった一つの形態を示している。

この協働関係は、後の地方文化の研究や地域資料館設立の動きを見ていくうえで、参考となる先行事例として位置付けることが可能である。

5-3 結論：地方文化研究史における協働の意義

今回の研究旅行報告書は、文献調査および現地調査を通じて、山口麻太郎と松永安左エ門の協働関係を検討した。その結果、両者の関係は、単なる研究者と支援者という枠組みにとどまらず、地域文化を未来へ残す協働者関係であったということを明確することができた。

特に① 山口の現地調査・資料記録能力と、松永の資金的・人的支援が結びつくことで、研究活動の継続性が確保されていた点。② 公的制度が整備される以前に、私設研究所が地域文化資料の集積と整理を担っていた点は、地方文化研究史を考察する上で注目すべき特徴である。

以上より、山口麻太郎の研究活動と松永安左エ門の支援は、壱岐における文化資料の保存と継承に一定の役割を果たした事例として評価することができる。

6. まとめ

今回の研究旅行を通して、壱岐、長崎、福岡、小田原、埼玉、東京の各拠点を訪問し、山口麻太郎と松永安左エ門の協働関係について、文献調査のみでは把握しきれなかった具体像をより明確にすることができた。

特に、松永による支援の根拠や具体的な支援内容については、各地の松永記念館等における調査を通じて理解を深めることができた。学芸員からの説明に加え、松永が壱岐在住の弟に宛てた書簡や、郷土研究に関する書簡を実際に確認できたことは、松永の思想や行動を実証的に捉える上で重要な成果であった。

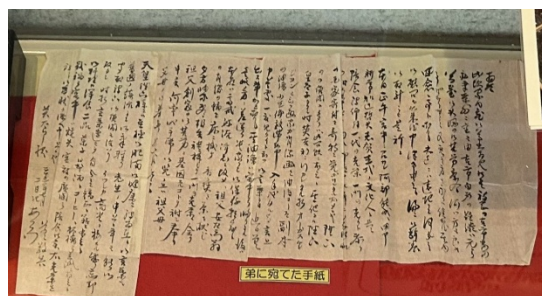


図 14 松永が弟（英太郎）に宛てた手紙

松永安左エ門記念館 所蔵 筆写撮影

今後は、今回の現地調査で得られた知見を踏まえ、卒業論文の完成に向けて、山口と松永の往復書簡の内容をより詳細に分析し、松永の助言や支援が山口の研究活動にどのような影響を与えたのかを検討していきたい。あわせて、山口が作成した資料や目録が、後年の県・市による文化財指定の過程において、実際にどのように活用されたのかを公的記録から確認し、両者の活動が果たした具体的な役割を明らかにすることを今後の課題とする。

【参考文献】

- 松永安左エ門（1970年）『松永安左エ門：自叙伝』財団法人 電力中央研究所
山口麻太郎（1933–1958年）『日誌 壱岐郷土研究所』壱岐郷土研究所
山口麻太郎（1965年）『郷土学の必要性と可能性を考える』日本民俗学会
財団法人 電力中央研究所（1980年）『松永安左エ門翁の憶い出 上巻』財団法人 電力中央研究所
山口麻太郎（1960年）『42 日本の民俗 長崎』中央公論社
山口麻太郎（1973年）『山口麻太郎著作集（全三巻）』角川書店
山口麻太郎（1950年）『壱岐国史』壱岐出版
山口麻太郎（1968年）『壱岐明治文化史』壱岐出版
山本隆夫（1982年）『壱岐島史年表』壱岐史研究会